

何とも情けない限りである。

長谷川岳参議院議員（北海道選挙区）の言動をめぐり、北海道や札幌市の職員が威圧的だと感じていた問題。札幌市は二〇二三年度、長谷川氏の面談だけのために、計七二回もの東京出張をしていた。他の国会議員の面談のみの東京出張は四議員に対し、わずか五回だけ。これだけを見ても、「札幌市が長谷川氏を特別扱いしていた」と考える市民が多いのではないか。

にもかかわらず、札幌市の秋元克広市長は、「出張に問題はなかった」というスタンスで事態の収束をはかろうとしている。長谷川氏との面談が突出しているのは、GX（グリーン・トランスフォーメーション）投資を呼び込む政府の金融・資産運用特区の指定に向け、国との調整に入ってもらったからだという。それにしても、異常とも言える多数の出張は本当に必要なのだろうか、十分な調査・検証が必要だと思いが、それもしないまま募引きをはかろうとしているのであれば、秋元市長の姿勢は率直に弱腰だと感じる。

◇ ◇

長谷川氏の問題が明らかになったのは、演歌歌手の吉幾三さんが動画投稿サイトに「飛行機内での横柄な態度」を暴露したこ

国と地方はパートナー

とがきっかけだった。さらに、一部週刊誌が「札幌市職員が過度に叱責されている」などと報道。記者会見で事実関係を問われた秋元市長が「かなりきつい調子で言われる方ですので、そういうふうを受け止める場合もあるかなと認識しています」などと発言した。また、北海道の鈴木直道知事も「感情的になり、言葉がきつくなるところがある」などと述べたことから、長谷川氏の言動などに注目が集まった。

この問題を初めて聞いたとき、筆者は、民主党政権下で復興担当を務めた松本龍氏（故人）による暴言問題（二〇一一年）を思い出した。宮城県・岩手県の知事らと面会した際、一方的かつ威圧的な暴言をくり返し、それをきっかけに就任からわずか九日で担当相を辞任した。宮城県の村井嘉浩知事は当時、「国と地方はパートナーとして尊重し相談しやすい環境をつくるべき関係にある」などと述べ、国と地方は主従関係にないことを強調していた。

長谷川氏は公式ブログで「私の過去の表現方法をめぐる報道がなされ、不徳の致すところです。私の表現方法が時代にそぐわないものであることを痛感いたしました。以後、時代に即した表現方法に変えて参ります」などと謝罪したほか、鈴木知事や秋

元市長に対し、改善することを約束したという。一つの政策をめぐり、国会議員が陳情を受けることは、永田町ではありふれた日常風景だが、お願いをされる立場だからといって、ハラスメントとも言える威圧的な態度が許されるわけではない。長谷川氏は「国と地方はパートナー」という視点を持ち、言動を改めることが求められる。

◇ ◇

北海道では、長谷川氏が参院地方創生・デジタル特別委員長に就任した際、鈴木知事を含む特別職六人と部長職二三人が祝電を送っていたことも判明。さらに、国の予算成立時には「お礼」のメールも送っていた。いずれも組織的に行っており、長谷川氏の威圧的な言動を避けるために行われていた可能性もあるとみられる。

こうした特別扱いが長谷川氏を増長させたのだとすれば、責任の一端は自治体側にもある。札幌市は、北海道のような特別対応はしていないかったと説明しているが、調査は十分に行われたのか。過度な出張回数も含め、その背景などを詳細に調査・検証することが再発防止につながり、良好な国と地方の関係を構築することに役立つはずだ。地方の矜持を持ち、毅然とした対応が求められる。

△陽▽